QOLサポーター新潟

No.14

新潟医療福祉大学
2007年9月15日発行
新潟医療福祉大学広報委員会編集

●学長メッセージ
●副学長メッセージ
●くらしサイエンス
・メタボリックシンドロームの発症・予防のための生活管理
・スポーツ障害の予防について
●プロジェクト研究センター紹介
・地域包括ケア研究センター・自立生活支援研究センター
●1年生紹介
理学療法学科・作業療法学科・言語聴覚学科・義肢装具自立支援学科
健康栄養学科・健康スポーツ学科・看護学科・社会福祉学科
●ランチタイム
●部活動紹介
●CAMPUS NEWS
●第7回伍桃祭案内
●受験案内

梅雨が明けて青空が広がる中、中庭で談笑する学生。前期授業も終わりに近づいて、試験に備えて頑張る中での休憩時間、束の間のリラックスした様子です。

学長メッセージ

QOLサポーターに求められる5つの資質

新潟医療福祉大学
学長 髙橋榮明

学長が考えるQOLサポーターに求められる資質についてお聞かせください。

本学では「優れたQOLサポーターの育成」を、理念として掲げています。QOLとは生活や生命の質（Quality of Life）を意味する言葉で、本学で育成する人材のイメージを「高齢者、障害者、傷病者など対象者のQOLを豊かにすることを支援する」という意味で「QOLサポーター」と呼んでいます。

そのQOLサポーターが備えるべき資質を、分かりやすく表現する言葉はないだろうかと学内の先生方と共に考えた結果、次の５つに集約しました。

まず第一が「優愛（ゆうあい）」です。これは辞書にはない造語ですが、対象者に無条件に優しく、愛情を持って接して欲しいという意味がこめられています。スポーツなどの厳しいトレーニングをしていても、対象者への心は優しい気持ちを持って欲しいと願っています。

第二の資質が「明朗」です。QOLサポーターは、対象者に対していつも明るく、朗らかで、常に前向きな姿勢で接して欲しいと考えています。

第三は「創造」です。現在の日本の社会は世界で例がない超高齢社会です。他人に追従するのではなく、対象者にとって何がベストかを常に考え、新しいことに取り組み、創ることが出来る人材が求められています。

第四に「情熱」を挙げたいと思います。仕事や活動全てにおいて熱い心を持って実践することが大切です。

そして第五に「協働」という言葉を選びました。これは保健医療福祉分野で仕事をする上で、最も大切なチームワークを表しています。まず対象者とのチームワークが大切です。病院や施設において他職種との連携は不可欠です。異なる専門職同士が情報を共有し、意見交換することで、より幅広い選択肢を提案することが可能となり、それが結果として対象者の方のQOLを高めることにつながります。

学生が在学時や卒業してからも、自分がどのように行動するべきか判断に迷う場面に遭遇した際には、「優愛」「明朗」「創造」「情熱」「協働」この５つの言葉を自問自答すれば、自らの進むべき道が示されるはずです。言わばＱＯＬサポーターの原点となる言葉と言えます。私が学生に大学の理念と共に胸に刻んで欲しい５つの言葉です。

QOLサポーターに求められる資質

優愛：あなたは対象者に優しく、愛情を持って接していますか。
明朗：あなたは対象者に明るく、朗らかに、前向きに接していますか。
創造：あなたは常に学び、考え、そして新しく創って、進んでいますか。
情熱：あなたは保健に、医療に、福祉に情熱を持って活動していますか。
協働：あなたは対象者と、あるいは他の専門職とチームワークで働いていますか。

副学長メッセージ

「医療福祉は新潟から発信される」と言われるような魅力ある大学づくりを

新潟医療福祉大学
副学長 米林喜男

今年度より副学長に就任された米林先生ですが、抱負やメッセージをお願いします。

副学長という職の役割について明確な定義が存在しないと言うのが、副学長職の面白いところではないでしょうか。

組織運営においては、「組織の目標を目指し組織を牽引する（パフォーマンス）」という要素と、「組織を維持しまとめていく（メインテナンス）」という２つの要素が重要です。大学によって学長と副学長がどちらの役割を担うかは様々ですが、本学のケースでは高橋学長が前者で、私が後者の役割を担うケースがおそらく多いでしょう。大学という組織にとって「人」という要素が非常に重要です。教員、職員、在学生、卒業生、それぞれ調和が取れて人間関係をスムーズに運ぶことが大切で、皆が楽しいと思い、またやる気を起こすことができるような大学運営を行っていきたいと思っています。その為には、時には学長のブレーキとなり、時にはアクセルとなり、エンストを起こさないよう組織の運営をしていくということが私の副学長としての役割ではないかと思っております。

また、現在、医療の分野は大きな転換期を迎えています。以前は病気の原因を突き止め治療を行うキュア（Cure）が医療の中心であり、患者さんの生活の世話や介護、心理的援助などを含むケア（Care）は地域社会や家族が担ってきました。しかし、現在では地域社会も家族も大きく変貌してしまったために、医療現場においてもキュアだけではなく、ケアを行うことが必要となりました。そこでは医師以外の様々な専門職の活躍がより期待されているわけです。この様々な専門職というのが、本学で育成する医療・保健・福祉の専門職です。本学はまだ若い大学ではありますが、日本海側唯一の保健・医療・福祉の総合大学としてその存在を確立して、いずれは社会で「医療福祉は新潟から発信される」と言われるような魅力ある大学づくりを学長とともに行っていきたいと考えています。

今後取り組んでいく課題についてお聞かせください。

本学の使命は保健・医療・福祉分野の専門職の養成であり、リベラルアーツ教育を標榜する他の大学とは少し違った性格があります。専門職の養成では専門知識・技術とともに専門職としての態度や使命感をバランス良く身につけることが理想であると考えています。この3つの領域の中でも、特に態度は知識として身に付くものではなく、体験を通じて体得しなければいけません。態度を身につけるためには、例えばボランティア活動に自発的に参加し、本来の専門職の基本的精神である他人に対する思いやりや地域社会への奉仕の心を養っていくといったことも大切です。専門職としての知識・技術・態度の３つを身に付けて卒業することができると、社会で評価される有為な人材となることができるでしょう。その為に副学長としてまた一教員として教育に一生懸命取り組んでいきたいと思います。

メタボリックシンドロームの発症・予防のための生活管理

最近よく耳にする「メタボリックシンドローム」。けれどもその実態についてよく分かっている人は意外に少ないのではないでしょうか。そんな「メタボリックシンドローム」について、本学健康栄養学科　准教授　渡邉榮吉先生より、その診断基準とどうすれば予防できるのかについて解説していただきました。

健康栄養学科
准教授　渡邉榮吉

●メタボリックシンドロームの診断基準を知ろう

表１に示した内臓脂肪蓄積に加えリスクが２つ以上集積されていることが必須条件となります。メタボリックシンドロームはそのまま進行すれば、いずれは心血管病を発症してしまう病態です。この集積するリスク数が増加するにつれ、動脈硬化性疾患の発症率が加速する病態でひいては生命の危険にさらされることになってしまうことを理解することが必要です。

●内臓脂肪蓄積を促進する生活習慣の特徴（図１）

内臓脂肪型肥満では1回の食事に30分以上かけて満足するまで食べ、間食が多く、アイスクリームを好むという食習慣上の特徴があります。肥満ではないが内臓肥満蓄積を認める群では、食事を満足するまで食べ、緑黄色野菜が嫌いという。いずれも肥満者に特徴的な食行動の傾向がみられることから、内臓脂肪蓄積例では肥満度にとらわれずに生活指導上の注意が必要となります。

嗜好調査によると、内臓脂肪蓄積肥満者では喫煙者の割合も多いという特徴的な結果が得られています。喫煙は動脈硬化のリスクが一層高まることから喫煙している方は、今すぐ禁煙を勧めます。

内臓脂肪の軽減のための最も有効な手段は運動の励行です。日常生活での運動の調査において、皮下脂肪型肥満者では日常の移動手段として徒歩や自転車を使い身体活動が活発であるのに対し内臓脂肪型肥満者では自動車による移動が多く、普段の運動不足が目立ち、このライフスタイルが内臓脂肪増加に強くかかわっていることが明らかになっています。このようなことから、運動の継続とその効果判定としてのウエスト周囲径計測を日常生活で習慣づけることが予防治療上大切です。この特徴をよく認識し、積極的かつ継続的な生活管理を実行することがメタボリックシンドロームの発症・予防治療上のポイントです。

内臓脂肪蓄積	ウエスト周囲経	男性85㎝以上 女性90㎝以上
	（内臓脂肪面積 男女とも100㎠以上に相当）	
上記に加え以下の2項目以上（男女とも）		
高トリグリセリド血症	かつ／または	150㎎/㎗以上
低HDLコレステロール血症		40㎎/㎗未満
収縮期血症	かつ／または	130㎜Hg以上
拡張期血症		85㎜Hg以上
空腹時血糖		110㎎/㎗以上

表1：メタボリックシンドロームの診断基準
（2006年　肥満症ガイドラインより引用）

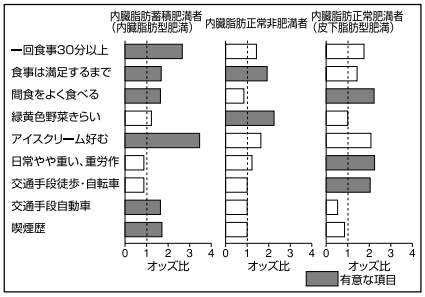

図1：内臓脂肪蓄積例における生活習慣上の特徴
（厚生省健康科学総合研究事業 松澤班2001より引用）

スポーツ障害の予防について

中学校や高校の時に部活動のやり過ぎで腰や肩を痛めた経験がある人は少なくないと思います。そんなスポーツ障害について、どのような場合に起きて、どうすれば予防することができるのかを、本学健康スポーツ学科　教授　石川知志先生（整形外科医・日本体育協会公認スポーツドクター）より説明していただきました。

健康スポーツ学科
教　授　石川知志

●スポーツ障害の予防

スポーツでは、走る、跳ぶ、投げるなど様々な運動動作が繰り返し行われます。骨、関節、筋肉は、運動を行うのに都合の良い構造をしています。しかし加わる力が強大な場合は骨折、脱臼といった外傷が発生し、過度に使い過ぎると野球肩、野球肘といわれるような障害が発生します。同じ内容の運動をしても障害を起こしてしまう選手もいれば、平気で運動を続ける選手もいます。このような違いが生じる原因の１つに、選手個々のからだの差があります。たとえば、中学３年生の子どもでも、すでに大人のからだになっている子もまだ成長の途中の段階にいる子もいます。成長過程のからだの骨や、関節の部分には軟骨成分が多く残っています。軟骨は骨に比べると外力に耐える力が弱いため、運動の繰り返しの負担は、軟骨のキズにつながります。この軟骨のキズが原因となって障害を発生してしまう場合があります。このような障害を防ぐためには、全員が同じ運動を一緒に行うのではなく、からだの状態に応じて運動の質・量の個別性を考慮する必要があります。運動開始前にはどれくらいの運動から進めていくのが適切かを考えます。運動の継続中には現在行っている運動は負担が大きいか、あるいはまだまだ余裕があるかという評価を行い、運動内容の見直しをします。この判断にスポーツ医学の面からのメディカルチェックを用いることが、スポーツ障害予防には最も有効です。ただすべての運動参加者がメディカルチェックによる対応を受けるのは困難です。簡便なチェック法として運動時の痛みの有無があります。からだが耐えられる以上に負担となる運動を無理に行うと、からだは痛みという注意信号を発します。痛みを我慢した運動の継続は、スポーツ障害進行の危険を伴います。痛みを生じる問題は何か、運動の質・量の見直しはどのようにしたらよいか、スポーツ専門家との早目の相談で解決することが障害予防には必要です。

毎日の投球練習により、肘を支えている靭帯に緊張が加わります。その繰り返しの結果、靭帯が切れてしまうかわりに、靭帯の付着している骨が引き離されてしまった野球肘の一例です。矢印は骨折を起こした部分を示します。

プロジェクト研究センター紹介

「プロジェクト研究センター」は、従来の学部・学科の枠を超えて、新たに設けられた「研究推進機構」という独立した枠組みの中に設置されています。

“プロジェクト”の名前が示すように、この研究センターは本学教員のみならず、国内外から広く研究者が参画できる仕組みとなっており、主に共同研究を推進するために設置され、先端的、今日的な研究テーマに柔軟に取り組む研究組織です。また、学外との共同研究、委託研究に柔軟かつ敏速に対応できる仕組みになっていますので、優れた研究成果と、その成果の発信に大きな期待が寄せられています。現在6つ設立されている研究センターのうち、今回は「地域包括ケア研究センター」と「自立生活支援技術研究センター」について、その取組みを紹介します。

地域包括ケア研究センターの取り組み

副学長
社会福祉学部長／教授
地域包括ケア研究センター長
米林喜男

■研究センターの目的

わが国は、少子高齢化の著しい進展に伴い、個人の健康のあり方や保健医療福祉サービスの提供体制のあり方などにおいて大きな転換期を迎えています。しかし、これらの諸問題に対しては未だ具体的かつ有用な方策が見出されているとはいえない現状にあるといえます。保健医療福祉サービスが適切に機能分化された形で、かつ全体としても効率的な形でのサービス提供がなされるためにはそのための社会的基盤が各地域において必要となりますが、こうした社会的基盤を保健医療福祉サービスの社会的環境要因として位置づける見方が存在しています。欧米諸国やアジア諸国においても、こうした観点から社会的基盤に関して近年、研究が進められているのです。

こうした現状を鑑みて、本研究センターの目的は、地域を基盤とした包括的なケアサービスの構築についての社会的基盤のあり方を検討して、一定地域における保健医療福祉の適切な機能連携による、効率的なケアサービス提供体制の確立とその具体的な施策について検討を加えることにあります。これらの研究を遂行することによって、わが国の保健医療福祉サービスの提供体制が抱えている諸々の課題の克服に貢献するだけでなく、同様の政策的な課題に直面している他国での政策展開に対しても大いに寄与するものと思っております。

■研究センターの活動内容のご紹介

では、本研究センターの活動の一端をご紹介したいと思います。平成18年度は国際研究交流活動の一環として、３回に渡って学術セミナーを開催しました。具体的には、保健医療福祉サービスの質の向上に資する諸外国の先駆的な研究成果について、わが国における適応の可能性に関して広く検討することを趣旨とするとともに、研究者に限らず学生、市民などに幅広く公開し、さらには国際交流の場となることを目的として以下のような学術セミナーを実施しました。

①マルチレベルモデリングの保健医療福祉研究への応用に関するセミナー

第1回学術セミナーでは、「マルチレベルモデリングの保健医療福祉研究への応用に関するセミナー」と題して、アメリカのハーバード大学のSV Subramanian氏、国立保健医療科学院疫学部の福田吉治氏を講師として、平成18年10月23日（月）に大学共同利用機関法人情報・システム研究機構　統計数理研究所にて開催しました。主に保健医療福祉分野の研究者を対象とし、その中でSV Subramanian氏は「マルチレベル分析とは」、「保健医療福祉分野におけるマルチレベル分析の適用」と題して、地理的空間性を加味した統計手法の有用性に関して講演を行ないました。

②ソーシャル・キャピタルと健康に関するセミナー

第2回学術セミナーでは、「ソーシャル・キャピタルと健康」と題して、アメリカのハーバード大学のIchiro Kawachi氏、SV Subramanian氏を講師として、平成18年10月26日㈭に大学共同利用機関法人情報・システム研究機構　統計数理研究所にて開催しました。本セミナーは保健医療福祉分野の研究者にとどまらず広く一般に公開され、その中でIchiro Kawachi氏は、「ソーシャル・キャピタルと健康」と題して、近年、保健医療分野において関心が高まりつつあるソーシャル・キャピタルについてその概念と健康との関連性に関して講演を行ないました。SV Subramanian氏は、「ソーシャル・キャピタル研究におけるマルチレベル分析」と題して、地理的空間性を加味した地域情報であるソーシャル・キャピタルが個人の健康に対して及ぼす影響を分析することが可能となる高度統計手法マルチレベル分析について講演を行ないました。

③マルチレベル分析応用セミナー

第3回学術セミナーでは、「マルチレベル分析応用セミナー」と題して、京都大学地球環境学大学院の市田行信氏を講師として、平成19年３月24日㈯に立命館大学歴史都市防災研究センターにて開催しました。本セミナーも保健医療福祉分野の研究者にとどまらず広く一般に公開され、その中で市田行信氏は「マルチレベル分析について」と題し、マルチレベル分析の基礎的な統計構造とマルチレベル分析の事例について講演を行ないました。

こうした研究センターの活動実績をふまえ、本年度においても各関係機関との連携のもとに積極的に活動を行なっていきたいと考えています。

第2回学術セミナーでのIchiro Kawachi先生講演の様子

自立生活支援技術研究センターの取り組み

自立生活支援技術研究センター長
義肢装具自立支援学科教授
大鍋寿一

■研究センターの目的

福祉工学や支援技術（Assistive Technology）を使用して、高齢者・障害者ならびにその周りの方々のQOL向上をはかります。QOL向上は自立が根幹をなすものであり、世界共通です。そのための科学技術を研究し、地域社会のみならず国際社会へ還元することを目的としております。

■研究センターの活動の進め方

上の目的を達成するため、ピッツバーグ大学のQOLテクノロジーセンターをはじめ国内外の教育研究機関と連携して研究をすすめております。本学においては、義肢装具自立支援学科、理学療法学科、作業療法学科、看護学科、健康栄養学科、社会福祉学科はじめすべての学科が関係しています。

■研究センターの活動内容

本大学にても学生ボランティアによってアジアに送る中古車いすを修理する活動が始まり、そうした活動をする国際ボランティアの希望者は60名を越えるまでになりました。昨年度はスリランカにて、日韓の工業高校生・大学生らと共に車いす修理のボランティア活動を行いました。また、平成20年、新潟において国際交流にも力をいれた「第23回リハ工学カンファレンス in 新潟」が開催されますが、その際、「空飛ぶ車いす修理技術交流会」を併せて開催すべく検討が進められています。

これらの活動を通して、エンパワメント（力をつけること）を志す援助者が援助を通してエンパワーされるという経験、および、そういった関係を形成支援する支援システムの開発が必要であることを感じました。そして、現在そうした支援システムの成長・発展において本学の自立生活支援技術研究センターの役割には多彩な分野、WHO等の多機関より大きな期待が寄せられています。障害者・高齢者に対する支援システムを開発するために、福祉工学、生活支援工学、社会福祉学、看護学といった分野を包括した実践・研究を行います。

■「空飛ぶ車いす」国際ボランティア活動実績

本研究センターの大きな成果としては、学内教職員の協力を得てすすめた「空飛ぶ車いす」国際ボランティア活動があります。

①昨年度途中から本活動をはじめましたが、新潟医療福祉大学で本活動を行うシステム（中古の車いすの入手、修理するための工具一式、修理のKnow how, 修理、搬送等）を確立しました。

②昨年度は車いす２台スリランカへ発送（１台は船で輸送、１台は持参）しました。

③メガネ（30ヶ）、書き損じハガキ収集を行いました。

④本学より３名（大鍋（義肢装具自立支援学科）、杉本（看護学科）、理学療法学科３年生）スリランカでの日韓共同国際ボランティア活動に参加しました（図１，２参照）。

⑤「平成19年第22回リハ工学カンファレンス in 名古屋」等で関連論文を３件発表しました。内１件は国際交流セッションで発表し、またアジアにおける「車いす」を介したボランティア活動の意義と課題に関しても発表しました（図２参照）。

⑥学会等での発表により、工業高校の先生方も生徒達も、国際交流だけでなく学術的な雰囲気に新しい意義を感じると好評です。

⑦本研究センターの活動は、米国ピッツバーグ大学ならびに世界保健機関（WHO）からも関心を寄せられています。

⑧平成19年７月27日秋田で開催された「空飛ぶ車いす技術交流会 in 秋田」に出席（図３参照）し、平成20年には交流会を「リハ工学カンファレンス in 新潟」で同時共催すべく工業高校、日本社会福祉弘済会と意見交換を行いました。

⑨交通バリアフリー新法の観点から旅客船における聴覚障害者のための情報提供機器に関する研究の被験者としてボランティア参加しエンパワメントの双方向性（障害者とボランティアとの関係性）に関する研究に取り組んでおります。

図1：スリランカでの車いす整備後の日韓高校・大学生、スリランカ関係者

図2：ボランティア活動における「意義」と「願い」

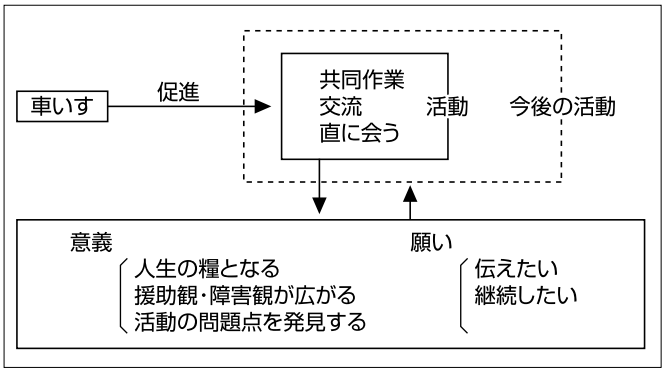

図3：秋田で行われたみちのく車いす技術交流会

今後の活動

①「平成20年第23回リハ工学カンファレンス in 新潟」を本学が中心となって実施するのに協力します。

②「スリランカ人による車いす修理・整備の可能性について現地実情調査研究」を行います。

③修理済み車いすの東南アジアへの運搬（例：出張時に各自持参）に関しても、学内展開を行います

④本活動でえられたKnow Howをベースに障害者の自立支援活動を地域社会へ展開します。

仲間とともに、積極的に学習を進める大学生活

理学療法学科

入学して半年が経ち、大学生活にも少しずつ慣れてきました。私たち１年生は、充実した毎日を送っています。その中で授業の様子を紹介します。「基礎ゼミ」では、各ゼミでテーマを決定し、文献やインターネットから情報を収集し、コンピュータを使用して内容をまとめ、最後に発表するという作業を行いました。最初はぎこちなかったゼミのメンバーとも次第に打ち解けていき、調べる・まとめる・発表するという過程を学びました。また、ゼミのメンバーとも仲良く交流ができ、チームワークを高めることができました。

理学療法の基本となる解剖学や生理学の授業では、高校とは違った授業のスピードや内容の濃さに最初は戸惑っていました。しかし、そのスピードにも慣れはじめてきて、最近では学ぶ喜びを感じながら授業を受けています。今は教養科目がほとんどで、理学療法の専門的な授業をまだ受けていませんが、これから専門的な内容が多くなります。大学での学習方法で大切なことは、自らが積極的に学習を進めていくことが非常に重要です。さらに、仲間と共に教え合い・刺激し合いながら、勉強を進めていくと効果倍増です。これからも授業や学生生活を充実させていきたいと思っています。

先日行われたオープンキャンパスでも、手伝った学生の一人一人が、新潟医療福祉大学の理学療法学科の学生であることに誇りを持っている様子が伺えました。この大学に入学してたくさんの仲間ができ、その仲間からたくさんのことを学び、これからも日々成長していきたいと思っています。

（理学療法学科１年　佐藤愛美）

オープンキャンパスでの集合写真

電気治療体験の様子

入学してからを振り返って

作業療法学科

作業療法士を志し、本学に入学してからあっという間に半年が過ぎました。入学当初は新しい環境に慣れることで精一杯でしたが、今は大学生活にも慣れ、多くの仲間たちと充実した生活を送っています。

私は高校卒業後に専門学校へ行き、半年間社会人として働いてから本学に入学しました。以前は回復期リハビリ病棟で働いていたのですが、そこで実際にリハビリの様子を見て「作業」するということは人間にとってとても重要なことだと知り、障害をもった方が日常生活を取り戻すための援助をしたいと思いました。しかし、その時に考えていた以上に作業療法は幅広い分野で用いられることをこの半年間で学びました。様々な知識や技術が必要となるので、勉強面では大変なことが多いですが、同じ目標を持つ仲間たちとお互いに助け合い頑張っています。先生方や先輩たちもみな親切で優しくしてくださり、もっと学びたいという気持ちでいっぱいです。選択科目やサークル活動では、他学科の学生との交流もありいろんな人たちと知り合うことができました。各分野でスペシャリストを目指す学生との出会いを通して、専門職に必要な「チーム医療」の重要性を学ぶことができると思います。多くの学生と過ごす毎日はとても楽しいです。

本学は横のつながりだけではなく、縦のつながりも強いと思います。先輩たちからわからないことを教わり知識を吸収することで、私たち後輩は難しい期末テストを乗り越えることができました。これからも自分自身で学びたいと思い実行する気持ちを忘れずに日々の勉強に取り組んでいきたいと思います。

（作業療法学科１年　石附しのぶ）

1･2年生、教員との交流会

大学生活を始めて早くも半期が過ぎました。各学科の1年生が何を学び、どのような体験をしたのかをそれぞれの学科が紹介します。

新しい環境、新しい日々

言語聴覚学科

入学してから４ヶ月が経ち、大学生活にもようやく慣れてきたかな、とういうところです。１年生は教養科目が多く、医療に関わる勉強は「解剖学」や「生理学」などを学んでいます。解剖学や生理学は、高校などで習うような生物の勉強と同じようなものかと思っていましたが、人間の細部にいたるまで名称がついており、その機能を知ることはこれから自分が医療従事者の一人になるのだという実感がわいて、大変ではありますが興味深い学問だと思いました。言語聴覚学科としての専門科目はまだ「発達心理学」という、人のこころが成長する過程を知る教科しかしていませんが、後期からは耳鼻咽喉科学などもっと専門的な勉強ができるそうです。全学で行っている基礎ゼミⅠでは、各グループに分かれて言語聴覚士として関わるいろいろな障害について調べ、オープンキャンパスで展示をしました。嚥下障害など、私たちもまだ勉強していないことばかりでしたが、高校生にもわかるよう工夫をして資料を作りました。まだ、専門分野の講義が始まらない分、言語聴覚士の仕事を少しは垣間見ることができておもしろかったです。高校では、与えられた課題をこなしていけば良かったのですが、大学は自分たちで課題を見つけていかなければならないので、少しとまどいもあります。しかし、先生達からアドバイスを受け、興味を持ったことをいろいろと調べるのは楽しい作業でもありました。

もう一つ、基礎ゼミⅠでの活動として言語聴覚学科内で交流会を行いました。お昼を先生達と一緒にグループで食べて、ソフトバレーボール大会を行いました。学校生活では仲の良い友達同士でいることが多いので、普段はあまり他の人と話す機会がありませんが、グループはランダムに決められているのでいろいろな人と交流することができました。また、同じ学科の先輩達もチームとして参加して対戦したり、普段は講義でしか関わらない先生達とも一緒にゲームをして、意外な一面を見ることができました。

新しい生活には戸惑いもありますが、勉強に遊びに頑張っていこうと思います。（言語聴覚学科１年　山口　恵）

言語聴覚学科内での
交流会の様子

１期生は学科の歴史を作ります!!

義肢装具自立支援学科

義肢装具自立支援学科は、今年度から新設された学科なので１年生しかいません。いざというときに頼れる先輩はいませんが、少人数のためか学生同志とても仲がよく、イベントなどには全力で臨む、笑顔あふれる楽しい学科です。

授業は前期から基本工作論という製作実習の科目があります。金属加工や石膏をあつかうなど、とても興味深い内容です。このように実践的な授業を始める時期は、他学科に比べると早いらしいのですが、早い段階から専門的なことに触れることができるのは本学科の特色でもあると思います。また基本となる解剖学の学習は、アナトミーマラソンという自主勉強会を毎週行い、和英両方の専門用語を覚えようと頑張っています。

義肢装具自立支援学科はイベント参加にとても積極的です。４月に行われたキャンパスツアーに始まり、毎回気合が入っています。来場される方には笑顔で親身な対応を心がけ、旗や看板などの飾り付けは学科全体の活気を表現し、より理解していただくために毎回趣向を凝らしています。参加者の方からも好評なようで大変嬉しいです。

また教員と学生の交流も盛んです。普段から各先生方の研究室への学生の出入りも多く、和気あいあいとしています。６月に海辺でバーベキュー、７月にはゼミ別対抗でソフトボール大会を開催しました。７月には学科のポロシャツが完成したり、学科学生会の立ち上げなど、私たち１期生は学科の歴史を一つずつ作っているのだという充実感があります。

こんな楽しくやりがいのある学科ですが、義肢装具や福祉機器分野の今後を担う人材となれるように、１期生として努力を重ねていきたいと思います。（義肢装具自立支援学科１年　前田藍子）

海辺の森での
バーベキュー大会

オープンキャンパス
受験生の皆さん、
待ってるよ!

楽しかった!! 海辺の森のキャンプ体験レポート

健康栄養学科

健康栄養学科では、毎年１年生が大学近くの「海辺の森」でキャンプをしています。その目的は生徒同士の交流と、先生方との交流を深めることです。これからその体験談を斎藤・冨所・山口がお伝えします。

冨：この前のキャンプ、楽しかったね。
山：初の共同作業で一気に皆が打ち解けられたよね!
斎：その中でも夕食作りは腕の見せ所だったね!!　私の班は鉄板サイズの巨大お好み焼きを作ったよ！　他にも、焼きそばや、キムチ鍋、すき焼きなどを作った班もあったよね。
山：栄養学科として自分達で献立も考えたし、できあがった食事はとっても美味しかった！
冨：その後のレクリエーションも楽しかったよね♪
山：肝試しの準備と下見は本当に大変だったよ。
斎：怖くてドキドキのレクだったけど、先生方との交流の場にもなったよね。
冨：肝試しの後は寝られないかと思ったよ。だから、ついつい同じ班の人と遅くまで話し込んじゃったな。
山：でも、それもキャンプの醍醐味だよね！
斎：そんなこんなで朝が来て、本当にあっという間の１泊２日だったよね～
山：この日を境にぐっと距離が縮んだ気がするな！　学生同士とも、先生方とも。
冨：こんな風に､これからもたくさん楽しい思い出作っていこうね!!
斎：そうだね!でも、健康栄養学科として、勉強も忘れずにね♪

（健康栄養学科１年　斎藤・冨所・山口）

キャンプ場のテント横にて

キャンプ場のテント内にて

大学生と実業団選手を両立して

健康スポーツ学科

私は現在、新潟アルビレックスランニングクラブの実業団選手として競技活動を続けています。また将来の目標の一つである体育の教員を目指すため新潟医療福祉大学の学生としても大学に通っています。これまで陸上競技を通じて多くの人と出会い、支えられ、そこから様々なことを私自身学ばせて頂きました。今後も感謝の気持ちを忘れずに学業と競技の両立にむけて頑張りたいと考えています。

私の目標の１つは、体育の教員になることです。それは私が体験したことや経験を積んで得てきたものを次世代に伝えていける魅力ある職業だと感じるからです。大学１年次の今年、教員の仕事を間近で見学する「観察実習」に参加し、初めて教師の視点から「教育」を垣間見る貴重な機会を得ました。こうした充実した学びの環境の中で、仲間達と目標の実現に向けて切磋琢磨しあいながら、有意義な学生生活を送りたいと考えています。

私のもう１つの目標は、競技者として、マラソンでオリンピックに出場することです。私は以前、走ることが嫌いで逃げていたこともありました。陸上競技は決して楽なスポーツではなく、苦しく辛いことも多いのですが、その苦しさを越えたところに楽しさが存在していることや､努力した分だけ結果がでることなどを、少しずつ理解できるようになりました。今では走ることが生活の一部となり、大好きです。実業団と学生生活の４年間は、世界を目指すための土台作りの時期と位置づけ、競技力も精神的な面でも着実に力を積み上げていくことが今後の課題です。

練習と授業、実習や大会・合宿遠征など、大学生と実業団選手の両立は決して簡単なことではありませんが、それぞれを追求していったところに自分の理想とする１つの将来像が見えるようになりました。私の活動を支え、応援してくれる多くの方々への感謝の気持ちを忘れずに、選手として周囲に感動や勇気を与え、将来は教員として社会に貢献できるように努力していきたいと思います。

（健康スポーツ学科１年　太田暁音）

新潟県選手権　©albirex-rc

1年生の大学生活を振り返って

看護学科

入学して早４ヶ月経ちましたが、考えていた以上に忙しく、しかし楽しく充実したキャンパスライフを送れています。大学では自分の興味関心のある分野の学習が主なので、授業への関心度は高く、集中して授業に取り組んでいます。また、同じ目標を持った仲間と生活する中で、多くの刺激を受けています。

４月は初めてのことだらけで、新しい環境や今までにない授業形式に慣れるだけで精一杯でした。しかし学校に慣れてくるにつれ自由な雰囲気に呑まれるようになり、勉強よりも友人と遊ぶ方がメインになっていました。それが６月にあった実習によって変化しました。

看護学生として初めての実習で、病院と地域からの目線で看護職の役割を考えさせられ、今まで漠然としていた看護に対する意識が明確になりました。また、自分の将来目指したいものの方向性が具体的に思い描けるようになり、講義も今まで以上に積極的に取り組むようになりました。さらにこの時期はレポートの量が増え、生活の主体が余暇を楽しむことから学習に変わり、一日の過ごし方が以前より大幅に変化しました。

前期も終わりに近づくにつれ、試験に対する意識が高まりだしました。それでも日々の講義やレポートに加え、筆記試験の勉強や実技試験の練習をすることは容易ではありません。しかし実習によって明確になった将来に対する気持ちや、看護職の現場から実際に自分で見て体験したことが忙しい生活の原動力になり、乗り越えることができました。

そして学習が一段落した今ですが、前期に学んだことのなかでまだ不十分なことが多々あります。それを夏の長期休暇の間に復習して自分のものにし、後期以降の学習に繋げていきたいと思います。

（看護学科１年　阿部ひとみ）

基礎ゼミⅠの発表会を終えて皆で記念撮影

大学生活4ヶ月を終えて

社会福祉学科

大学に入学して４ヶ月が経ち、これまでを振り返って思うことは、自分が高校のときに想像していたキャンパスライフよりもずっと充実した毎日を送れているということです。私は少し遠くから通学しているので、時間にかなりの制限が出ますが、その限られた時間を上手く使って、自分なりに楽しく過ごすことができていると思います。私は今３つのサークル、部活に所属していますが、いずれも先輩が優しくて盛り上げてくれるのでとても楽しく、高校ではできなかったボランティア活動などもたくさん体験しています。学習面では、今まで自分が勉強したかったこと、関心のあることを学んでいるので苦にはならず、高校生の時よりずっと真剣に取り組めています。友達も皆、同じ目標を持って集まってきた人なので、気が合う人ばかりでとても居心地が良く、講義の空き時間に友達のアパートで休んだり、車でお昼ご飯を食べに行ったりすることは大学生ならではだと思います。

また、大学生になって感じることは「すべてが自己責任である」ということです。レポートの提出やサークルの登録など、先生方が指示してくれるわけではないので、人間関係を広めることも、ボランティアを経験することもすべて自分から動かなくてはならず、時々大変だなと思うこともありますが、自己管理ができるようになってきたので良かったと考えています。これからは実習が入ってきたり、勉強も難しくなってきたりして、今より大変になっていくと思いますが、今の新鮮な気持ちを忘れないように、毎日新しい気持ちで過ごしていきたいと思います。

（社会福祉学科１年　海津友美）

1年生は、オープンキャンパスでも活躍しました。

キャンパスライフの話をしています

個別相談も担当しました

※写真と執筆者は異なります。

ランチタイム

大学の昼食時には学食を利用する人、お弁当を持ってくる人、様々です。
現在大学には学食が4つ、その他にコンビニがあります。
その中から、学生が自分のお気に入りの学食を紹介します。
また、お弁当持参の学生はその中身を見せてくれました。

ふれあい食堂派 安さと家庭的な味

ふれあい食堂の良さは、安さと家庭的な味の料理です。特に私のオススメは日替わり定食です。オムライスに親子丼など、毎日変化する楽しみもあるし、出来たての料理は、とても美味しくて幸せな気持ちにさせてくれます。しかも！安いのにボリュームがあるので、お腹いっぱいになりますよ。日替わりのお弁当も美味しくて低カロリーメニューです。また食事を調理してくださる人たちも元気いっぱいで、気持ちの良い人たちばかりです。居心地がいいので学生の溜まり場になったり、勉強場所としても活用されています。

義肢装具自立支援学科1年
伊東祐子

Kids派 お気に入りは「サラダうどん」

Kidsのお弁当やパスタはおいしいだけでなく、具がたくさん入っているので栄養が偏りがちなひとり暮らしの学生にとっては、とても助かります。特に夏に販売される「サラダうどん」はサッパリしていて、食欲がなくてもツルっと食べられます。Kidsはお店の雰囲気も良くて、学生ボランティアや先生も働いているので、とてもアットホームで居心地が良いです。そんなkidsはとても人気で毎日人がいっぱいです。晴れた日には外のテーブルで食べると一層、御飯がおいしく食べられます。

作業療法学科3年　黒田実佳

KIDSで人気のパスタ弁当

お弁当派 野菜中心のお弁当

私は毎日ではありませんが、時間があるときや、おかずを作りすぎてしまったときなどにお弁当を作るようにしています。親元を離れて、ひとり暮らしをしているため節約のためにも活用しています。お弁当を作るときに気をつけていることは、野菜中心にすることです。実家から野菜をたくさん送ってもらっているので、その野菜を中心に煮物や野菜炒めなどのおかずを作ります。お弁当を作るのは、いつもより早めに起きなければならないなど大変な面もありますが、バランスの取れたものを食べることができることや、節約という面を考えるとおすすめできます。ひとり暮らしを始めてまだ４か月なので、おかずのレパートリーは少ないですが、入学した頃と比べると多少上達したと思います。

看護学科1年　鈴木幸子

部活動紹介

大学には多くの部活動やサークルがあります。
その中から今回は、３つの部活動を取り上げて紹介します。

園芸部

私たち園芸部はアクティブな部を目指し、日々活動しています。大学の中庭の花壇で活動をしている人たちを目撃したことはありませんか。その人たちはボランティアではなく、園芸部なのです。見かけたときには声をかけて下さい。水遣りをいっしょにやりましょう。決して目立たない活動ですが、大学の真ん中で自由に花や野菜を育てられるのが園芸部なのです。今年度に入り、アクティブな顧問が就任したことで、園芸部は規模も活動もグレードアップしていきます。コンクールの参加など全国展開も視野に入れた活動を展開していきます。

園芸部 部長 佐藤奈美（社会福祉学科2年）

ハンドボール部

私たち新潟医療福祉大学ハンドボール部は、2006年に創部し、今年で２年目に入りました。毎朝第一体育館で練習しています。練習時間は平均で1時間半と少ないものの、部員全員一丸となり勝利を目指しています。去年は残念ながら２部リーグ２位という結果でしたが、リーグ優勝を争いました。昨年の悔しさを胸に今年の春季大会に臨みましたが、３位という結果に、またも悔しい思いをしました。今秋開催される北信越リーグでは1部に昇格することを目指し、練習に取り組んでいきたいと思います。

ハンドボール部 主将 外川裕史（看護学科2年）

茶道部

私達が学んでいるのは裏千家茶道です。お稽古は学内の和室で週に一回、顧問の先生と学外からお呼びしている先生のお二人に教えていただいています。部員は初心者が多く、気軽に楽しめます。また、着物の着付け教室も行っており、自分で着物 や浴衣を着れるようになります。学内の活動では、文化祭での出店、新入生歓迎茶会を、学外の活動では学生茶会やチャリティーなどへの参加を行っております。平成19年10月には裏千家信越北陸地区大会でお点前やお運びをする光栄な機会をいただき、稽古に励んでおります。

茶道部 部長 永島敦子（言語聴覚学科3年）

CAMPUS NEWS

快挙！本学水泳部2名が世界ランキングTOP50にランクイン！

2006-2007年度のFINA（国際水泳連盟）世界ランキングに本学水泳部の郡山奈々（健康スポーツ学科２年）、澤田涼（健康スポーツ学科３年）の２名が、それぞれ33位、36位に入るという快挙を成し遂げました。

これは、３月に東京辰巳国際水泳場にて行われた「競泳JAPAN OPEN 2007（第48回日本短水路選手権水泳競技大会）」での大会の結果を受けてランキングされたものです。この時、女子800m自由型において郡山選手が８分35秒92で５位、澤田選手が８分37秒09で６位という見事な結果を残しました。

下山監督は本学水泳部２名が世界ランキングTOP 50にランクインしたことについて、次のようにコメントしています。

「創部２年目にして世界ランキング50位に澤田、郡山が入れたことは、２名の選手だけでなく、本学水泳部にとって大きな自信となりました。さらに上のランキングを目標に、地方からビッグニュースを発信し続けることのできる部を目指して、日々精進していこうと思います。」

今後も水泳部の活躍をご期待ください。

バングラデシュスタディーツアー報告会

５月23日㈬、本学キャンパスにてバングラデシュスタディーツアー報告会が実施されました。健康栄養学科の村山伸子教授が支援する、日本・バングラデシュ文化交流会（以下JBCEA）主催の活動のひとつで、今年度２月に実施されたツアーでも本学健康栄養学科学生が３名参加し、バングラデシュの人々の栄養調査、生活実態調査など様々な調査活動を行いました。

今回、村山伸子研究室主催、JBCEA共催で行われた報告会では、学生21名、教員6名、ツアー参加者3名の計30名が参加し、JBCEAの概要やバングラデシュの紹介、スタディーツアー参加報告が行われたほか、ツアーに参加した学生が現地で教わってきた手作り菓子が配られるなど、和やかな雰囲気の中で行われました。

健康栄養学科では、今後もこうした活動への学生参加を推進し、国際協力活動も研究もできる、ホットでクールな研究者が育つよう支援していきたいと思います。

日本言語聴覚学会への参加報告

６月２日㈯に静岡県浜松にて日本言語聴覚学会が開催されました。

その中で学会プログラムの一つとして全国より７校の言語聴覚士養成校から学生が集まり、交流会が行われました。

本学からも言語聴覚学科３年生７名が代表として参加し、新潟医療福祉大学独自のカリキュラム（教育プログラム）である「基礎ゼミ」、「総合ゼミ」の紹介や、学内の厚生施設や先生の紹介などを行いました。

今回の交流会を通じて、他校の学校生活なども知ることができ、また同じ言語聴覚士を目指す学生同士の情報交換を行う場として、とても貴重な経験をすることができました。

第7回 新潟医療福祉学会 学術集会のご案内

今年度の学術集会は研究発表に加え、教育講演では臨床場面や研究における倫理的課題について、群馬大学大学院の服部健司教授から示唆をいただきます。また、交流セッションでは「嚥下・摂食障害のケア」「看護教育―大学と臨床の連携」「精神医療における多職種連携」の他に、地域住民の方を対象とした「健康長寿交流セッション」と「子どもの発達一体育・食育・生育」もご用意しました。

参加は無料です。多数の方々のご来場をお待ちしています。

第7回 新潟医療福祉学会学術集会

日　　時：2007年10月27日㈯　9時30分～16時20分
会　　場：新潟医療福祉大学
主　　催：新潟医療福祉学会　学術集会会長　**渋谷優子**（新潟医療福祉大学　健康科学部長）
プログラム：
9:30～ 9:45　学会会頭挨拶　学術集会会長挨拶
9:45～11:45　一般演題：口演
12:30～13:00　新潟医療福祉学会総会
13:00～14:00　教育講演「ケアの専門性と倫理的課題」
14:10～14:40　一般演題：示説（ポスターセッション）
14:50～16:20　交流セッション

【学術集会事務局】新潟医療福祉大学 健康科学部 看護学科
FAX 025-257-4552　E-mail nakayama@nuhw.ac.jp
（E-mailかFAXにてお問い合わせください。）

学友会

第7回伍桃祭（大学祭）案内

「光」

8色の虹＝∞のかけはし

今年からまた新たに１学科が新設され８学科となった新潟医療福祉大学は、８学科それぞれが特徴を生かし、協力し、ひとつの大きな虹のようになりたい。そしてこのひとつの大きな虹がこの伍桃祭を通して学内だけでなく、地域の方々、障がいを持っている人やそうでない人、たくさんの人々が出会う機会となり、あらゆる人々とのかけはしになりたい。そのかけはしがこれから先も無限（∞）に広がり、一人ひとりが持っている個性を「光」として放ち、輝くものになりたいという願いをこめて、このテーマが生まれました。

伍桃祭実行委員会では多くの方々が楽しめるように、そして多くの方々が足を運びやすいように、地域の方々も参加しやすいさまざまなイベントを考えています。ぜひお越しください！伍桃祭のイベント内容は来てからのお楽しみにしたいと思います♪

この機会に８学科の特徴に実際に触れ、新潟医療福祉大学がどのような大学かを知り、ひとつでも多くのかけはしをみんなで創りあげていきましょう！！

10月６・７日、多くの方々の参加をお待ちしております。

第７回伍桃祭実行委員長　中野美沙

第7回 新潟医療福祉大学「伍桃祭」

10/6(土)・7(日)

- ●シドニーオリンピック女子100m背泳ぎ銀メダリスト 中村真衣さんによる講演会（実際に泳ぎを披露していただきます!!）
- ●各サークルによる発表
- ●出店
- ●ビンゴ大会
- ●イベント
- ●Ms. Mr. 発表
- ●チアダンス

などなど、他にもたくさんの楽しいことが待っています！ぜひお越しください!!

※詳しくは大学祭HPもしくは本学HPイベント情報をご覧ください。
大学祭HP：http://nuhw-gotousai.hp.infoseek.co.jp
本学HPイベント情報：http://www.nuhw.ac.jp/event/festival.html

受験生のみなさんへ

■募集学科・募集定員（1年次）

理学療法学科	80名	作業療法学科	40名
言語聴覚学科	40名	義肢装具自立支援学科	40名
健康栄養学科	40名	健康スポーツ学科	100名
看護学科	80名	社会福祉学科	120名

■入学試験日程 ※詳細は入試事務室までお問い合わせください。

入試区分	学　科	出願期間	試験日
A　O　入　試	全学科	8/27(月)～9/6(木)	第一次9/15(土) 第二次10/13(土)
公　募　推　薦	全学科	11/1(木)～11/8(木)	11/17(土)
スポーツ自己推薦	健康スポーツ学科	(前期) 11/1(木)～11/8(木) (後期) 11/26(月)～12/11(火)	(前期) 11/17(土) (後期) 12/15(土)
3年次編入学試験	健康スポーツ学科 看護学科　社会福祉学科	※出願期間、試験日は学科ごとに異なります。詳しくは入試事務室までお問い合せください。	
社会人等特別入試	全学科	11/1(木)～11/8(木)	11/17(土)
センター試験利用入試（前期）	全学科	1/7(月)～1/25(金)	1/19(土)・20(日)
センター試験利用入試（後期）	理学療法学科　言語聴覚学科 健康栄養学科　健康スポーツ学科	2/12(火)～2/22(金)	
一般入試（前期）	全学科	1/7(月)～1/25(金)	2/4(月)
一般入試（後期）	全学科	2/12(火)～2/22(金)	3/2(日)

※AO入試は出願受付を終了しました。
※社会福祉学科の3年次編入学試験は受付を終了しました。

入試トピックス

一般入試（前期）は新潟、東京、郡山、高崎、長野の5会場で受験できます。

これまで実施の3会場（新潟県、東京都、福島県）に加え、新たに「長野県長野市」、「群馬県高崎市」にも試験会場を設置予定です。該当県の学生はもちろん近県の方もアクセス良好です。

過去問を請求して、出題傾向を把握しよう！

過去3年分の入試問題をまとめた「新潟医療福祉大学 入試問題集」を発行し、無料配布しています。本学HPの資料請求フォームでお申込を受け付けています。（請求フォームの備考欄に「入試問題集希望」とご記入ください）

イベント案内

■キャンパスツアー

第1回／10月 6日(土)
第2回／11月 3日(土)
第3回／12月 8日(土)
第4回／ 3月22日(土)

大学概要説明、入試概要説明はもちろん、施設見学、個別相談コーナー等充実のプログラムを用意しています。受験準備も後半戦に入る10月、11月はいよいよ一般入試に向けて、代々木ゼミナール講師による英語対策講座が行われる予定です。また、10月は本学大学祭である伍桃祭が同日開催となりますので、この機会にぜひご参加ください。

入試やイベント情報等、詳しくはホームページをご覧ください。

新潟医療福祉大学

〒950-3198 新潟市北区島見町1398番地　TEL025-257-4455㈹　FAX025-257-4456
URL http://www.nuhw.ac.jp/　携帯サイト http://www.nuhw.jp/m/
【入試事務室】TEL025-257-4459　E-mail nyuusi@nuhw.ac.jp

誌名「QOLサポーター新潟」の由来　世界一の長寿国となった我が国では、「いのちの長さ」を伸ばすことと同様に、「生活の質、Quality of Life, QOL」を豊かにすることが、益々重要になっております。新潟医療福祉大学では障害者、高齢者などのQOLを高くすることを支援する（サポート）人材を育成します。このような人材を「QOLサポーター」と名づけました。そして皆様に本学の内容、活動をお知らせする広報誌を「QOLサポーター新潟」としました。